

雁タク利用広がる認知度

広島市都心部の川で雁木タクシーを運航する広島市西区の特定非営利活動法人(NPO法人)雁木組の発足から一年が過ぎた。利用者は、当初見込み通りの約四千四百人。「水都」広島 of 財産を活用した「雁タク」は、新たな交通手段として市民権を得つつある。日常的に市民に愛されるよう、最大の課題である潮の干満への対応にも乗り出した。

(小川満久)



雁木NPO発足1年



干満が影響 対応に本腰

「雁木TAXI」ののぼりを掲げた小型船が、秋風のそよぐ川面を縫う。雁木は、昭和初期まで木材などの揚げ降ろしできるのが魅力だ。

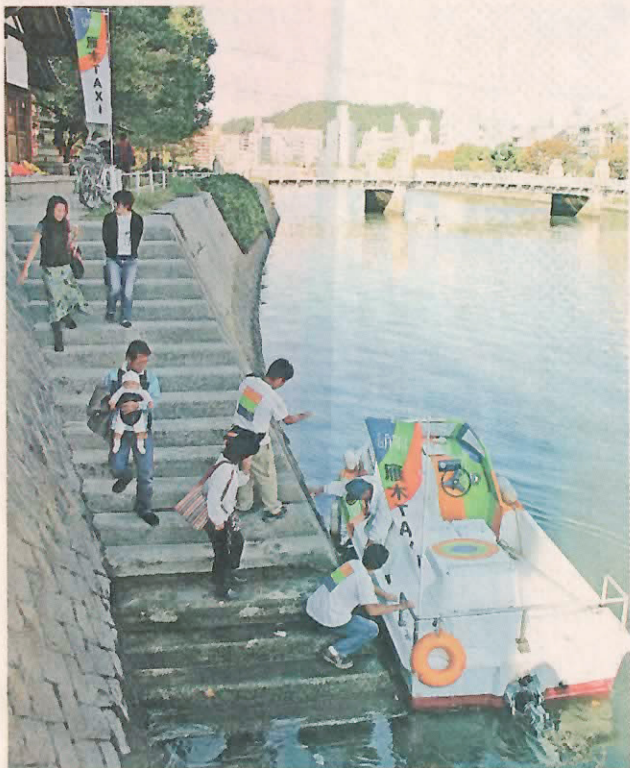
4400人が楽しむ

雁木組は昨年十月、県から法人認証を受けた。「川は広島之宝。多くの人に親しんでほしい」。

県や市が進める「水の都の底上げが欠かせない。構想」策定に携わったのを機に中心メンバーとして事業に加わる氏原睦子事務局長が狙いを語る。乗客は一年間で四千四百八人に上った。フル稼働すれば年間一万人以上を運ぶことができる。しかし雁木組は、「安全性を最優先した初年度としてはまずまずの結果」と話す。

四対六一。雁木組の課題を端的に表す数字だ。利用者の数、市民と観光客の比率である。定着を期すなら、地元の利用者の底上げが欠かせない。「市民が日常の交通手段として認知してくれるきっかけにしよう」。雁木組は九月の三日間、「ノーマイカーデーひろしま2005」に協賛して割安運航を企画した。期間中、潮の干満で午前中しか走れない日もあったが、通勤客ら計六十人が乗り、メディアも報じた。主催団体の一つ、中国運輸局の小池敏宏環境安全防災課長は「多くの市民に広まったのでは取り上げた。七月に発行された旅行情報誌「るるる広島」も掲載した。雁木台帳作成や観光PRに対し、今夏に河川環境管理財団(東京)、秋にはJT B協定旅館ホテル連盟(同)が助成した。二年目に向けて、雁木組は雁木や広島川のPRにも本腰を入れ始めた。都心部で生き続けるシジミ漁をもり立てようと、乗客に紹介したり、郷土史家と連携した雁木の歴史調査も計画だ。

「川に船が行き交い、水辺で市民が憩うのが日常風景になれば」と氏原事務局長は願う。実現のためには、幅広い市民を巻き込んだす野の広い活動が欠かせない。



待する。「さわやかな気持ちで出社できた」と初めて乗った中区の会社役員小只幸代さん(42)。そして、「乗れる時間帯が事前に分かると使いやすいくだけ」と言葉を綴いだ。

雁タクの運航には、少なくとも水深が六〇センチ必要。市内の川の一日の干満の差は最大四尺。西区

「雁タク」で川の旅を楽しもうと、雁木から乗り込む客たち

(中区橋本町の京橋川)

クリック し、雁木組の発足に合わせ本誌スタートした。現在4隻。電話で呼べば近くの雁木まで迎えに来る。運賃は10分間で1人500円。雁木組は08年3月から試験的に運航

ひろしま総合